地中海アザラシとギリシャ人

引　地　正　俊

I

ギリシャ人とアザラシとの付き合いは永い。文献上の歴史から見ても、古代ギリシャでアザラシを指す φώκη なる語は、すでに最古の大叙事詩人とされるホメーロスに出てくるからである。ただし、この単語は二大叙事詩のうち、『イーリアス』の中には見当らず、『オデュッセイア』のみに計七回出てくる(1)。しかも、一例を除いては、きわめて限られた箇所に用いられているもので、第四巻のほぼ中間の五十行足らずの範囲に集中している。そこはトロイア戦争後、父オデュッセウスの行方を探してスパルタまでやってきたテーレマコスに向って、スパルタ王メネラーオスが、かつて自分がエジプトに留まっていた時のことを語るところで、女神のエイドテアーが現われ、メネラーオスに語りかけ、女神の父で海の老人と呼ばれるプローテウス Πρωτεύς を捕えれば、スパルタへの帰り路も王家の様子も分かると教える。そこでメネラーオスは、プローテウスをどうしたら捕えられるのか、その方法を女神にたずねる。女神の答えは、海の老神がいつも正午に海中から出てきて、洞窟の中で昼寝をするから、それを待ち伏せして捕えよ、というもので、そのときプローテウスのまわりには多数のアザラシが群れて眠るが、まず老神はアザラシの数を勘定してまわり、数え終ると群の真中に、あたかも羊の群の番をする羊飼いのように横になって眠る。その寝入った時をねらって捕えるわけであるが、そこで注目されるのは、アザラシの吐く息が深海の底の非常に臭気の強いものだ（406）と女神が伝えている点である。いよいよ待ち伏せの時、三人の部下を連れてやって来たメネラーオスに、女神は大海の中から剥いだばかりのアザラシの毛皮を四枚持って来て、砂浜を掘って隠れさせた四人に覆いかぶせてくれる。その上、鼻の下に神饌とされるアンブロシアーを当てがって、その芳香でアザラシの悪臭を消してくれる。その結果は、人間四人もアザラシの仲間に数えて横になったプロー

テウスを首尾よく捕えることとなる。

この話以外に唯一度アザラシへの言及がなされるのは第十五巻の豚飼いエウマイオスの話である。豚飼いの身の上話の中に出てくるフェニキアの女が、船中でアルテミス女神の矢に当って倒れるが、それを悪者共は「アザラシや魚の餌にでもなれとばかりに」（480）海中に投げ落したという。この例を見ても、叙事詩の背景となっている時代にはアザラシは珍しい生物ではなく、地中海に多数が群れていたと考えられる。

ところで、叙事詩の中で最初にアザラシなる語が出てくる第四巻（404）には、ホメーロスの作品全体を通して唯一回しか用例のない、いわゆる hapax の νέποδες という珍しい単語が出てくる。この語は、ヘレニズムの時代になるまで[2]、古典期にも類例がなく、古来その意味がさまざまに解釈されている。古註に従えば、一つの解釈は νέ- を νή- と同じ欠性辞と考え、＜足が無い＞ ἄποδες と取る。これは魚のように足に類するものが全く無いというわけではなく、身体の大きさに較べて非常に小さな足を持つという意味だとする。別の解釈は＜足で泳ぐ＞ νηξίποδες と取るもので、魚類と区別するために足で泳ぐ、すなわち＜水掻きのついた足＞を持つと考える。いずれも昔の人がアザラシの特徴をどのように捉えていたかを示していて興味深い解釈であるが[3]、近年ではむしろラテン語 nepotes やサンスクリットの nápataḥ と関係づけて考え[4]、足ではなく＜子供たち＞、＜子孫＞と解釈するほうが一般的である。どの解釈を取るにしても、この語に続いて「美しい海の（女神の）」καλῆς ἁλοσύδνης という語句があるので、仮りにこれが女神を意味するものであるとすれば、いずれの女神かが問題となろう。ホメーロスのアザラシの語はすべて複数で、単数の形は出て来ない。アザラシたちの母親はどの女神であろうか。ἁλοσύνης は『イーリアス』に同じ行末の位置で、ネーレウスの娘で海の女神テティス Θέτις の枕詞（エピテトン）として用いられている例がある[5]。しかしながら、英雄アキレウスの母親であるこの女神が、アザラシたちを産んだという神話は残っていないようである。他の女神としてはポセイドーンの后アンピトリーテー Ἀμφιτρίτη が考えられることがあるが、この女神の場合も、神話に海豚は出て来ても、アザラシたちの母ないし祖先とする神話はちょっと見当らない。この単語が“潮”、“海” ἅλς と関係することは間違いないであろうが、叙事詩人が明言していない以上、女神を特定するのは難かしいと思われる。

プローテウスがアザラシの群を従えているのには何か理由があるのであろうか。この点については、十二世紀のビザンチンの学者エウスタティオスが、その尨大なホメーロスの註釈の中で、「アザラシたちは妖術に有用ゆえと古註釈者たちは言う」と述べている。たしかに、いわゆるホメーロスのスコリアの中には、「プローテウスがアザラシたちと一緒に住むのは、予言術のためには他の海洋動物に較べ、最も役に立つゆえ」と書いてあるものが残っている。海の老人プローテウスには予言の力があるほか、自分の体をさまざまの動物の姿に変える術が備わっている。アザラシによる占いの例が挙げられていればよいのだが、果して変身術の役に立つのか、あるいは占いに用いるものか、註釈には具体的な記述が無いのは残念である。

II

ギリシャ神話の中には、プローテウス以外にはアザラシと関係するものはないであろうか。ヘーシオドスの『神統記』には「だが海の老人ネーレウスの娘のうるわしい女神プサマテーは、黄金のアプロディーテーによってアイアコスの愛をうけ、ポーコスを生んだ」(6)という詩行がある。ここに出てくるポーコス Φῶκος は有名なトロイの木馬を発明したエペイオスの祖父に当るが、その名は女性名詞であるアザラシ φώκη の男性形に過ぎない。ヘーシオドス自身はポーコスについては、この詩行以上のことは伝えていないが、エウリーピデースの『アンドロマケー』にはポーコスがアキレウスの父ペーレウス（およびテラモーン）によって殺害されたことに言及する箇所がある。その箇所（687）に対する古註を見ると、ネーレウスの娘すなわちネーレーイスのプサマテー Ψαμάθη はアイアコスと交わるのを嫌って、アザラシに変身したと記されている。この話を伝える神話の文献は乏しいが、例のアポロドーロスの『ビブリオテーケー』には(7)、エウリーピデースの古註と殆んど同じ表現で、アイアコスがアザラシに身を変じたプサマテーとの間にポーコスを産んだとの記述がある。なお古註は、アイアコスがプサマテーと結ばれる以前に、エンデーイスと結婚していて、二人の間にテラモーンとペーレウスが生まれたと述べ、ポーコスは異母兄弟によって殺されたことを伝えている。なお、エウリーピデースの『ヘレネー』によれば(8)、プサマテーはその後プローテウスの妻になっているのである。このあたり、いかにもアザラシとの縁が深いと言わざるを得ない。資料

としては、ほかにもピンダロスが『ネメア』の第五歌で、プサマテーがポーコスを生んだのは「浜辺」ないし「波打ち際」であると歌っているが[9]、これはアザラシの出産を暗示したものであろう。舞台はアイギーナの島になっている。ピンダロスの古註はギリシャ神話の貴重な宝庫であるが、この箇所についての註には、残念ながらプサマテーのアザラシへの変身の話は出て来ない。

ポーコスがアザラシの姿をした母親から生まれた場所がアイギーナ島であったとすれば、そもそもの原因はポーコスの祖父のゼウス大神にある。ゼウスはアーソーポス河神の娘のアイギーナを見初めてこれを奪い、それまではオイノーネーと呼ばれていた島まで連れて行き、島の名も彼女の名に変えてしまったからで、二人の間に生まれた息子アイアコスが島を統治することになる。神話の中の年代を考えるとすれば、アザラシの姿の母親がアザラシの男性形の名の子を出産したのは、その子孫が木馬を発明したとされるので、トロイア戦争の世代の三代前の話という計算になる。少なくとも、このような神話の太古には、アイギーナ（エギナ）の島にはアザラシが沢山いたものと思われる。

地誌学者パウサニアースの記述によれば[10]、アイアコスの息子ポーコスはアイギーナ島から、現在（すなわち紀元後二世紀）ポーキスと呼ばれている地を支配し定住するつもりで、ギリシャ本土に渡ってきたという。ポーキス Φωκίς なる地名は、その土地の王となった先祖ポーコスの名に由来するが、パウサニアースは同じ第十巻の冒頭では、ポーキスに名を与えた最初の人物はアイアコスの息子とは別人で、コリントスからやって来たオルニュティオーンの息子のポーコスとしている。時間的な隔たりは、パウサニアースによれば「多くの年数ではない」が、アイギーナの人々が来たほうが後だというのである。そうだとすれば、オルニュティオーンの父親は例の急坂に石を押し上げるシーシュポスであるから、建国の祖は永劫の罰を受ける男の孫に当たる。いずれにしても、パルナッソスの山やデルポイのあるポーキスの地名にもアザラシの意味が含まれているのは興味深い。

ポーキスの地名を確立することになったアイアコスの息子のほうのポーコスは、その後、郷里のアイギーナに呼び戻された折に、すでに触れたように異母兄弟の手にかかって死ぬが、その原因はアザラシの息子が競技に優れていたためで、嫉みを買ったとされる。二人の異母兄弟のうち、殺害を実行したのは籤引きで決めたペーレウスで、五種競技の折に石製の円盤をポーコスに命中させ

たといわれている。しかし、シチリアのディオドーロスの歴史記述によれば[11]、これは円盤が誤って当ったもので、故意ではなかったとされる。いずれにしても、アイギーナの島にはアイアコスをまつる立派な社アイアケイオンがあり、その社に並んで円形の土台に土を盛り、さらにその上に石を置いたポーコスの墓があるのをパウサニアースは紹介している[12]。アイギーナの島についてもパウサニアースは、ゼウスが河神の娘を連れてくるまでは無人島であったと述べ、島の周囲に暗礁や岩礁があるため、ギリシャの島々の中でも最も船を近づけ難いとしているので、この環境は後述するようにアザラシが繁殖するには最適であったと考えられる。

アザラシとの関係では、小アジアの沿岸のポーカイア Φώκαια の地も忘れてはならない。位置としてはアイオリスの中に入り込んでいるイオニア北端の町であり、やがてはイタリア半島南部のエレアーや、現在ではフランス南部のマッサリアー（マルセイユ）を建設するなど大活躍をするが、その最初はギリシャ本土からの移住で、アテネのピロゲネースなどによって導かれたポーキスの人々が海を渡って来たという[13]。この都市の市民たちは明確にアザラシとの縁を意識していて、ポーカイアの硬貨には、少なくとも紀元前六世紀から、独特のアザラシの姿が彫られていたのである。

アザラシ Φώκη の語源については明確ではないが、多くの学者が考えているのはオノマトペの擬音語説で、印欧語の語根＊p(h)u から来たもので、アザラシの立てる口笛を吹くような声を真似たとするのが有力である。つまり古いギリシャ語の「（息を）吹く」φυσάω などと同語源と考えるわけで、いずれにせよ、地名ばかりでなく、例えばミーレートス出身の前六世紀の詩人ポーキュリデース、前四世紀のアテネの政治家ポーキオーン、紀元後五世紀の文法家ポーカースなどの人名はすべてアザラシと関係がある。もっとも、地名のポーカイアは、この町すなわち現在のトルコのフォーチャ Foça の海岸近くにある島の形がアザラシに似ていることから出来た名前ではないかという形象的な由来も考えられている。

III

硬貨の図柄に現われる前六世紀には、いわゆる壺絵にもアザラシは登場し、ヒュドリアに描かれた例が残っているが、文学史の上では、年代の特定できな

いいわゆるホメーロス讃歌にもこの海獣は出てくる。それは『アポローン讃歌』の中で[14]、アポローンの誕生の島となるデーロスが、アポローンの母レートーに向って、将来この島に人が居ないため蛸や「黒いアザラシども」が安心して住める巣を作るのではないか、と言っている例であるが、これもアザラシが繁殖し易い環境を示していて注目される。

アザラシの利用としては、舞台は地中海ではないが、ヘーロドトスの『歴史』[15]に例がある。これはアラクセース河の下流附近の話で、カスピアー（カスピ）海の辺りであることは間違いないが、そこに注ぐヴォルガ等の河以外に、アラル海に注ぐ河もヘーロドトスは混同しているらしいので、正確な土地は分からない。アジアのその辺りに、「生の魚を食し、アザラシの皮を衣服として常用している人間たちが住んでいると言われる」と記している。唯それだけの文章であるが、アザラシの皮を衣服にしているのは、ギリシャ人から見ればいかにも未開の生活と映ったようである。

古典期のギリシャの作家としてはアリストパネースの喜劇の中にアザラシへの言及が見られる。前四二二年冬のレーナイア祭に上演された『蜂』には「アザラシの臭気」という表現があるが、これは人間について比喩的に発した合唱隊の言葉である。ところが、翌年の早春の大ディオニューシア祭に上演された『平和』の中にも同じ「アザラシの臭気」が用いられている[16]。それだけでなく、『平和』のこの語句の前後五行には『蜂』と全く同一の科白が並んでいる。これは合唱隊が観客に向って劇作家の主張を伝えるパラバシスの中で用いられているので印象的であるが、諷刺の矛先は、民衆を扇動する政治家デマゴーグとしてのクレオーンに向けられていると考えられる。アリストパネースの『蜂』の古註によれば、ここで臭気を持ち出したのは、クレオーンの家が革なめしを職としていたことによる。長期にわたるペロポネーソス戦争による民衆の苦難の時代に、痛烈な攻撃の効果を高める目的で、悪臭の代表としてアザラシが挙げられているのである。このような用例があるためとも考えられるが、十世紀ごろの成立と見なされるビザンチンのスーイダース（スーダ）の辞書のアザラシの項には「悪臭の海獣」というだけの簡単な語釈が載っている。いかにもアザラシには気の毒な感じであるが、古代においては、アザラシには悪い印象が伴うことが多いようである。ローマのウェルギリウスの詩にも、アザラシは数回登場するが、そのうち『農耕詩』の第四巻に出てくる海神ネプトゥーヌスが

海中に養っている生物は[17]、「醜悪な」ないし「気味の悪い」アザラシどもなのである。

アリストテレースの『動物誌』にはアザラシのさまざまな特徴が述べられている。それによるとアザラシは非常に好戦的であり、同一の場所を占めて、同一の食物をとって生きていく動物の同種族間の闘争の代表例として扱われているが、同じ地域に住むアザラシは、子供でさえも、雄は雄を相手に、雌は雌を相手にして、互いにどちらか一方が相手を殺すか、追い出してしまうまで闘いをやめないといわれている[18]。アリストテレースの情報には、アザラシには耳が無い、また胆嚢も無いなどという、古代人の認識として興味深いものも含まれているが、例えば、沼や川の岸で餌をとる四足獣のカワウソやウミダヌキなどに対し、海岸近くで餌をとる野生（四足）獣はアザラシ以外に居ないと言っているのは[19]、当時のギリシャ人の知っていた地理的範囲に限れば真実であろう。ちなみに、ローマでは博物学者プリーニウスがアザラシを＜海の子牛＞ vituli marini の名で挙げ[20]、アザラシたちが陸上で呼吸したり眠ったりすると記している。同じくローマでは、詩人のオウィディウスが、ケーピーソス河神の孫がアポローンによって肥えたアザラシに変えられた、と歌っているが[21]、その人物の名前は挙げられていないので、今日では不明になっている何らかの神話が古代に存在し、それに言及したものかと思われる。オウィディウスの詩の中で、天から落ちてゆくパエトーンには、キュクラデスのあたりに、日輪の熱のためにアザラシたちの身体が、海面に仰向けになって浮かんでいる光景が見えるが[22]、古代の海では、アザラシたちは特に人間から愛されることもなく、あちこちの島に群棲する平凡な動物だったに違いない。もっとも、三世紀初頭にギリシャ語で『動物誌』を書いたアイリアーノスは、海綿採りの醜男の海士にアザラシが恋をするという説を紹介しており（5.56）、これは人魚姫伝説との関連で非常に興味深い。

IV

海豹と書かれるアザラシはアザラシ科 Phocidae に属する海獣で、現在十九種が知られているが、地中海のアザラシは北半球に分布する十四種のうちの一種である。地中海アザラシは現代ギリシャ語の η μεσογειακή φώκια と呼ぶもので、あくまでも通称であり、分類上は、モンクアザラシ属に入るので、チチ

ュウカイモンクアザラシの呼称のほうがより正確であろうが、もちろん最も正式なものはラテン語の学名 Monachus monachus である。属と種を示す＜修道僧＞の名の由来は、この属のアザラシの頭部が、カトリックの修道僧が頭蓋を覆う帽子スカルキャップをつけた姿に見えるところからとされる。このモナクス・モナクスは、かつては地中海の海岸に少なくとも何千頭もの数が居たと思われるが、仲間のカリブカイモンクアザラシ、およびハワイモンクアザラシと共に激減してしまい、すでに絶滅したと考えられているカリブカイモンクアザラシに次いで絶滅の危機に瀕している。しばらく前の推定では、多く見積っても二百頭から二百五十頭が限度の数で、ギリシャの島々の一部に辛うじて生き残っているというのが現状である。

チチュウカイモンクアザラシは、大きな個体では体長三メートルに達し、体重は 350kg にもなる。体の色は淡灰色からコーヒー色、黒色の範囲で、腹側の色は幾分薄く、白色の斑点のあるものもいる。肉食のため歯が発達して狩猟に適し、好んで魚と蛸を食べる。水中での狩りは上手で、鼻孔を閉ざしたまま息を止めた状態で少なくとも 15 分は潜水し続けることが可能で、深さも 50 メートルに達するという。その繁殖は、水中で番いを成し、出産は夏の終りか秋、通常は一頭しか生まれない。赤坊は体長一メートル程度で、体重は 10〜15kg、授乳期間は二ヶ月ほどで、その後は母親が狩りを教える。

さて、このようなチチュウカイモンクアザラシは何故に激減してしまったのであろうか。その原因としては以下のようなものが考えられている。

まず、地中海の汚染。いわゆる海洋の汚染により水質が悪くなり、餌とする魚にも有毒な物質が含まれるようになり、アザラシを衰弱させることになる。

次に、自然のままの海岸の減少。アザラシの生棲には砂浜ではなく、岩石の多い磯が適していて、さらに繁殖のためには静かな洞窟が必要である。それにもかかわらず、人間の生活上の利便さが求められ、セメントで磯が固められてしまう海岸が多くなって、アザラシを自然環境から締め出してしまう。

あるいは、無制限な観光産業。地中海の陽光を求め、夏のシーズンを中心に、ギリシャに押し寄せる外国人は年毎に増加している。生活が豊かになった都会のギリシャ人の希望を満たすためにも、ギリシャの島々のいわゆるリゾート施設の開発は驚くほど急激に進行していて、バカンス・シーズン中の超過密な人口のための水資源、汚水処理は、大量のゴミ処理とともに、オリンピックの近

づいた現在、大問題となっている。このようなリゾート産業の隆盛はアザラシたちの平穏な生活を妨げ、繁殖を阻害することにもなる。

漁獲量の過多。漁法の変化も手伝って、収益を高めるために大量の魚を取るようになった。その分アザラシの餌となる魚や蛸が乏しくなっている。

このことと関連して、漁業具にかかってしまい、傷つくアザラシが増える。また餌が乏しいため、魚を求めて丈夫な歯で漁師の網を破り、怒った漁師に退治される。

漁船ばかりでなく、観光客の遊ぶ多数の高速船などのスクリューに接触する危険が増えている。

以上のような原因はいずれも人為的なものであるが、これらが複合して働き、それに微妙な気候の変化等も加わってアザラシの減少を招いたものと考えられよう。

このような傾向を放置してはならないとする意見は、すでにかなり以前から出ていた。その具体的な成果としては、例えば国立公園の設定を挙げることが出来よう。ちょうど今から十年前の 1992 年、『アロニソス＝北スポラデス国立海洋公園』 το Εθνικό Θαλάσσιο Πάρκο Αλοννήσου - Βόρειων Σποράδων が創設された。略称は頭文字を並べた ΕΘΠΑΒΣ である。自然の景観の美しさのみを重要視するなら、数多いギリシャの島々には、優先されるべき地域が、ほかに幾らでもあった筈である。特にこの範囲を海洋公園とした理由はアザラシにある。現在、ギリシャでは、わずかに残るアザラシの生棲地を詳細に発表することはしていないようである。そのわけは、名もない小島に生棲している場合が多いことにもよるであろうが、それ以上に、彼らの隠れ家を世間一般に仔細に公表すると、思いもよらぬ迷惑を彼らにかけることになりかねないからではあるまいか。しかし、大まかな範囲としてはこの公園の名の島々が最も重要な生棲地であり、アザラシたちの保護と増殖を目指すことを最も主たる目的として、自然の景観を守るべく定めたのが ΕΘΠΑΒΣ であった。

そのほかにも有志の集まった協会が存在する。『地中海アザラシの研究および保護協会』η Εταιρεία για τη Μελέτη και Προστασία της Μεσογειακής Φώκιας で文字通りの活動を目的とした非営利組織であり、発足は海洋公園の創設よりも五年も早い。略称は地中海アザラシの学名から取った MOm で、十八歳以上の人なら年会費 5,500 ドラクマで会員になれる。すでに会員数は六千を越

え、調査船『オジシア』、および快速艇『アロニソス』を使って活動している[23]。この調査船の名は古代のギリシャ語では「オデュッセイア」であるから、その命名はアザラシが初登場する叙事詩に由来すると見て間違いないであろう。しかしながら、詩神に訴えかけて想像の海をめぐる冒険の船旅を歌った叙事詩の名を船名としたのには、それ以上の願いが託されてのことなのかも知れない。何しろ、この協会の目的は、地中海アザラシとその自然環境の研究保護をすることだけにとどまらないのだから。待望の海洋公園を守り、さらにエーゲ海およびイオニア海に保護地域を造ることを目指しているのである。そのための日常的な活動としては、母親を失った孤児アザラシや弱ったり傷ついたりしたアザラシに助けの手をさしのべ、一方では世間への呼びかけにも力を注いでいる。特に期待しているのは未来の地中海世界を担う子供たちで、各地の学校に協力して、用意した教材を提供したり、生徒たちの声を集め、その要望にこたえようとしている。特に夏休みの季節を活用し、例年、スコペロス、カルパソス、アロニソス（古代のハロネーソス）の島々などで教育活動を行なって来ており、人々の関心も高まっている。このような努力の賜物であろうか。目下、海洋公園の中だけで約 60 頭のアザラシが確認されている。その一方で国家予算は厳しく、'02 年度は 7 月末の段階で「環境用地計画公共事業省」はこの活動維持のための予算を取っておらず、昨年以来 7 千万ドラクマかかった経費のうち国から出たのは 1 千 5 百万ドラクマだけであった。13 年に及ぶ公園の過去の活動費用を見ても、そのうち 44.36%のみが国の出費、それに EU が 14.5%を援助し、残りは全て MOm が負担したのであった。

ギリシャの現在は、木材の伐採や山火事による森林破壊、またオリンピックの船舶競技施設の建設による海浜破壊など、陸海の環境問題が深刻化している。しかし、これは単にギリシャ人の課題にとどまるものではないであろう。あるいは悪臭を放つとされ、あるいは醜いとされて、古代には必ずしも珍重されるものではなかった地中海アザラシが、その絶滅の危機によって、失われかけている神話の太古以来の地中海の美しい自然景観の保護の問題のみならず、地球全体の環境の危機を全世界に訴えているのには感慨深いものがある。

注

(1) IV.404; 411; 436; 442; 448; 450. XV.480.

(2) Theokritos 17.25; Apollonios Rhodios 4.1745; Kallimachos fr.222 etc.

(3) 例えば紀元後 100 年頃の Apollonius Sophista の『ホメーロス辞典』Lexicon Homericum によれば、紀元後 1 世紀の文法学者 Apion も＜足が無い＞と解釈していたことが分かる。辞典編纂者自身は＜足で泳ぐ＞を支持していたようである。

(4) Wackernagel: Vorlesungen zur Syntax.II.252.

(5) Ilias 20.207.

(6) Theogonia.1003-5.

(7) Apollodoros: Bibliotheke.III.12.6.

(8) Euripides: Helene. 6f.

(9) Pindaros: Nemea. V. 12.

(10) Pausanias. X.30.4

(11) Diodorus Siculus. IV.72.6.

(12) Pausanias. II.29.9.

(13) Strabon. XIV.1.3.; Pausanias. VII.3.10.

(14) Hymn. Apoll. 77.

(15) Herodotos. I. 202. 3.

(16) Aristophanes: Sphekes.1035; Eirene 758.

(17) Vergilius: Georgica. IV.395.

(18) Aristoteles: Historia Animalium. 608b22.

(19) ibid. 594b30.

(20) Plinius: Naturalis Historia.IX.19.

(21) Ovidius: Metamorphoses. VII.389.

(22) ibid. II. 267.

(23) 地中海アザラシの現状については、ギリシャの新聞＜Η ΚΑΘΗΜΕΡΙΝΗ＞の近年の記事に負うところが多い。なお MOm の住所は Σολομού 18, Αθήνα 10682.